

勤務医部会だより

JCHO中京病院の紹介



幹事 絹川 常郎

本年4月1日をもって、旧社会保険中京病院は独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院と名前を変え再発足しました。随分長い名前でも利用者に覚えて頂くことが難しいので、機構ではJapan Community Health care Organizationの英語名の大文字の部分をとってJCHO（ジェイコー）という省略名を使うことにし、今はその普及に努めているところです。JCHOに属する病院は、全国で57病院あり、その内訳は旧社会保険病院が47病院、旧厚生年金病院が7病院、旧船員保険病院が3病院という構成です。規模別で見ると400床以上が9病院、200から399床が26病院、200床未満が22病院で、すべての病院が健診施設を有し、老人保健施設を併設する病院が26病院あります。

JCHOの使命をきわめて簡単に述べると、地域医療、地域包括ケアの要となって全国で地域医療・介護の向上を図りつつ、そのための人材育成にも取り組むことと、独立行政法人として透明性が高く、財政的に自立した運営を行うということになります。

実際のところ病院はどう変わったのかと良く聞かれますが、公設民営から、公設公営となったわけですから、移行の前後で職員は随分不安な時期を過ごしました。発足から5ヶ月を経た8月に入り漸く落ち着き、自分たちの役目を果たせるようになって来たといったところでしょうか。現実的には、救命救急センターの指定を受け663床を有する中京病院が提供する急性期医療が大きく変化することはありません。ただし、JCHOの使命である地域医療の充実を念頭におき、病診連携、病病連携の質を向上させるため、その方面での活動により意を注いでいるとは言えましょう。私から患者さんに向けては、地域の皆さまから「中京病院は素晴らしい病院である」という評価ではなく、「中京病院があるこの地域の医療は素晴らしい」という評価をいただける病院でありたいというメッセージを伝えています。

病院を運営するにあたっての今後の課題で一番気

になるのは高齢化社会への対応です。名古屋の人口は、まだしばらく増加しますが、南区は既に人口減少が始まっています。65歳以上の高齢化率は、本年は約28%と名古屋市随一で、高齢者は有病率が高いことから病院を訪れる患者は当分の間は少し増加することが予想されています。試算によると、南区では高齢者に多い骨折患者は2025年まで増加しそれから10年を経ても現在より多いようです。したがってこのような疾病構造の変化の予測も考慮に入れて、今後は今まで以上に、高齢者に対する医療を充実して行かねばならない事態に直面しています。合併症を多く抱える高齢患者が増加する状況にあっては、私は、急性期病院の専門医といえどもある程度は総合医的な診療能力を有し、在宅医療も理解している必要があると考えます。中京病院はそのような方針を理解する医師を配置することで、充実した地域医療提供のコアとなる病院となることを目指します。具体的な取り組みとしては、昨年からは後期研修医の認知症研修、本年からは前期研修医の在宅医療研修を開始したところです。これには、自院だけでなく、目的とする研修に最適な専門施設や近隣病院の協力を仰いでいます。

当院は100床の老人保健施設も有していますが、これを加えても当院だけで行える地域の高齢者への貢献には限界があります。今日まで、当院の様な急性期病院は、その能力を発揮できる患者さんの紹介を頂くため、地域支援病院の承認を受け病診連携を充実させてきました。しかし先ほど述べたメッセージを実現するためには、今後は、在宅医療を意識した新たな病病連携も重みを増してきます。「地域医療機能推進」という使命を課せられた当院は、この領域においても地域住民と地域医療者の信頼を得るべく活動して参ります。

(中京病院)